

れたることを記するに止まれども、もとより此等が皆同一の戦ひを記せるものなるは疑ひなく、サマルカンドの附近カトワン、ヂルガム等の地に於て戦ひたるものと見ざる可らず。而して此の戦ひの年次に就いては回教史家の記する所によりて、幸に遼史の誤りを訂し得べきが、其の一一四一年とすることにはイブン・エル・アチルもアブルフェダも同一なれども、たゞ前者は決戦の時を以て翌一一四二年とせり。余は今原本を見るを得ざれば、上記の如くブレットシュナイデル氏の譯出せる所に據りたりしが、然も同氏はまた露西亞のグリゴリエフ (Grigorieff) 氏の譯によりたるものなり。回教曆の五三六年は西曆の一一四一年より一一四二年に亘るものなれば或は原本には此等の戦ひにつきて月名をも記し、これによりてグリゴリエフ氏がかく兩年に配當したるものなるかも知る可らず。果して然らばアブルフェダにはたゞ回曆五三六年の年次ありて、ドギニユ氏は之を一一四一年と換記したるにすぎざる可ければ、兩者ともに亦相一致するものに外ならず。今イブン・エル・アチルの書を見るを得ざるを以て、此の點については此れ以上に論議するを得ざれども、近時の學者、ヴァムベリー氏の如き、バルトールド氏の如きは等しくイブンエルアチルの書に據りながら皆之を以て一一四一年のこととなせば (Vambery: Bokhara, I. 113. Bar-thold: Turkestan, 2nd part, page 349)、余もまた暫らく此等の諸氏に従ひて之を同年のことと見んとす。

五 大石の即位と西遼の年紀

本文によれば此のサマルカンドの戦の後、大石はこゝに駐ること九十日にして、西の方起兒漫に至り、甲辰歲二月五日始めて位に即きて葛兒罕^{ゲルカン}と號し、延慶と改元し、其の三年師を班して東歸し馬行二十日にして善地を得て都